



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 4 号

令和2年7月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

「僕たちにはやらなければならない義務があります」

校長 富田 敦

「3年生には『やらなければならない義務がある』ことを伝えたい」と吉田 啓明 生徒会長は話します。「3年生は1年生に教えねばならないことがある」「3年生は後輩に、背中で語らねばならない」と。

新型コロナウイルス感染防止対策で、3月から5月まで学校は休業が続いていました。学校が再開した今、吉田生徒会長からは、新学期に学校のリーダーとして3年生が活動できなかった無念と、これからでも最上級生としての自覚をもった行動をしようとする強い意志が感じられる言葉が次々出てきます。そこには最上級生としての強い思いが表れています。

行事が削減されていく中で、吉田会長は「体育祭を成功させたい」「部活動を最後までやり抜きたい」と語ります。体育祭では「1年生から3年生までのまとまりを作りたい。3年生が1・2年生の応援をする、下級生も3年生の応援をする、そういう一体感をもちたい」。この提案を実現するために、学校は座席割を変更することにしました。これまでは学年ごとに固まっていた生徒席を1組席【1・2・3年1組】2組席【1・2・3年2組】…とクラスごとの席割にしました。3年生が下級生をリードし、学年を越えて応援をする姿が目に見えます。



部活動は週3回の活動です。

部活動も不完全燃焼です。運動部では目標としてきた学校総合体育大会が中止になりました。文化部ではコンクールや展覧会が中止になりました。吉田生徒会長の「同級生に直接訴えたい」という気持ちを3年の先生方がくみ、会長の気持ちを各部長が自分の言葉で部員に直接話す機会を設定してくれました。ここでは2人の部長の話を紹介합니다。

男子バスケットボール部 中村 龍之介 部長「1年前に引退した先輩方は目標だった県大会出場を果たせませんでした。自分たちの代は先輩たちが果たせなかった県大会出場を目指して練習していました。長い臨時休校の間に目標を見失ってしまい練習に対して曖昧な気持ちになってしまった人もいます。『悔いが残らないように最後までやり遂げよう。やる気と誇りをもって後輩たちの目標とされる先輩になろう。背中で語ろう。』3年生の仲間、に部長として、卒業した先輩たちの思いを継ぐ者として、自分の思いを仲間に伝えられたと思っています。」

女子ソフトテニス部 仙石 みなみ 部長「私は7月まで練習ができ、北区交流親善試合もできると聞き、またテニスができることがうれしかったです。『でも、みんなも同じ気持ちだろうか、張り切っているのは自分だけなのではないだろうか』と不安な気持ちでもありました。目標を失ってしまった人やもう練習には出ないと考えている人、やる気が起きないなどと思っている人がいることも薄々感じていました。みんなの前に立って自分の思いを伝えなくてはならない時、涙があふれてきてしまいました。でも、『学総がなくてもがんばろう。私たちはあいさつをしっかりとする姿を後輩に見せなくてはならない。背中で示さなければならない』と仲間に本音で話すことができました。

2人は私に次のように話してくれました。「全員が1つの目標【北区で勝利する】に向かって努力します。みんなの気持ちを一つにして試合に挑みます。当日は『感謝の気持ち』をもって試合に臨みます。」

消えかけていた希望の灯が生徒会長の意志によって部長に広がり、多くの仲間の心に届きました。今、本来目指していた「大会」ではありませんが、自分のため、自分たちのため、後輩たちのために気持ちを一つにして活動に取り組むことにした3年生。毎年の3年生と同じく「感謝の気持ち」をもって取り組むと言います。

3年生、私たちの誇りです。